

分科会⑤

森のようちえんにおける安全管理
～森のわらべの実践より

講師：奥村則子・山口貴子
(森のわらべ多治見園)



主に、森のようちえんに興味がある、始めたいと思う人向けに「森のわらべ」での安全管理について紹介し、学びを得てもらう機会となりました。カエンタケに触れた場合に備えての石鹸水に関する質問があったほか、森のわらべ多治見園の保護者からスタッフに改めて敬意と感謝を伝える場面もありました。

毎日のこと

- 毎日の活動中に持ち歩くもの
緊急連絡先ホルダー、個人体調記録（毎朝記入）
- 車に常備しておくもの
非常用持ち出し袋、チャイルドシート、非常用品BOX

年間を通して

- 危険（生物）については子どもに何度も伝える
- ポイズンリムーバー使用の練習
- 避難場所、ルートの確認、災害用伝言ダイヤルの練習
- 普通救急救命講習の受講
- 保険の説明

〈マムシ咬傷事故をふまえ〉

毒ヘビについての知識を習得、共有。ヤマカガシとマムシの違い、マムシの個体差と幼態について、マムシにかまれた後の状態など。事故への備えとして、血清のある病院を調べる、事故予防のための情報共有、保護者との信頼関係の構築などが大切。

分科会⑥

森のようちえんってどんな保育？
～大切なことを「続けていく」こと

講師：小菅江美(森のようちえん てくてく)

森のようちえんを始めて10年。一人では出来ないけれど、子どもたちを含め、関わる人みんなの力を信じることで、誰もが役割を持つこと、それが「続けていく」上で大事なんですね。



- 教員時代に馬を学校で飼育したときのこと。作文や作画が、馬を通して進んでいく。原稿用紙が足りないくらい書ける。心が動くことがないと本来の主体的な学びが生まれないのでは？
- 2004年、絵本がきっかけでデンマーク視察。子育て広場を週1からスタート。2006年、毎日やろうと思いつく。最初の園児はたった一人から。でも仲間がいるから励みになる。
- デンマークを視察してみて、日本の風土には、森のようちえんというより里山の中にある暮らしを作るといことが大事と思った。毎週2回は火を扱うようにしている（調理や暖房）。
- 子どもたちが歩いているとき、先頭にも後ろにも先生は付かない。少し離れたところから見ていく。介入しない。どろどろになりながら助け合いながら目的地に到達する。
- 「信じている」というベースがあれば待つのが楽しくなる。大人がひっぱるのは小学生になってからでも充分。ちょっと待ってみることで成長の芽が見えてくる。
- 山の所有者さんに管理を任せられたとき、園児のお母さんたちに相談してみた。お母さんがチェンソーを持つ、椅子をつくる。覚悟が決まった。みんなで森づくりを始めよう！

- 森のようちえんは、みんなが森を大切にしているからできる。みんなそれぞれに力をもっている。薪割りをしている横で見ていく子どもは「お父さんになりたい」と思う。
- 今の暮らしは簡単すぎて人の力がいらぬ。でも森の暮らしは人の力が必要。人の価値を高めることが大事。

分科会⑦

行政がはじめた森のようちえん
美しいふるさとの風景を残していくために

美濃加茂市長 藤井浩人・
里山再生プロジェクト



「森のようちえんは『行政が手を出すほどに素晴らしいものだ』と市民に思ってもらえるよう活動していきたい」という美濃加茂市の意気込みが参加者に伝わり、大盛り上がる分科会でした。

市長講演 美濃加茂市長 藤井浩人

- 美濃加茂市では人びとが里山とどうやって付き合っていくのかを考えている。(美濃加茂市の『里山千年構想』はHPを参照)
- 行政がやるべきこととは「利益を度外視してもあるべき姿を示すこと」
- あるべき姿とは、「自然に活かされているという感覚をもつ」「自然と共生していく」ということ。

里山再生プロジェクト 今井英里

- 森のようちえん活動前に、近隣園児を対象に「ヤギさんふれあい教室」「しいたけ菌打ち体験」を行い、好評を得た。
- プロジェクト2年目にイベント型の森のようちえんを開催。10名の定員に倍ほどの申込あり。市民の関心の高さがうかがえた。
- 市が主催することで、森のようちえんの知名度や正しい認識が広がっていくのではないかと。市長が活動に姿を見せ自ら参加することで、より伝わっていく。

意見交換

— 行政と民間で、求める実績がズレている。森のようちえんの経験が小学校で途切れてしまう。

Q: 市主催の財源は？

A: 里山整備には補助金があるが、森のようちえん自体には出ていない。今後は人件費と保険料をつけたい。

Q: 行政をうまく活用するにはどうしたらいいか？

A: 行政側にメリットがあることを示す。行政には市民が納得する形で金を使う使命があるため、メリットが明確でないと動けない。
— 美濃加茂市としては、里山プロジェクトは山の整備、維持管理を行うことを目的としている。里山の大切さを何とか子ども達に伝えて、里山を守ってほしいと考えている。そのために、「森の小学校」「森の中学校」などの活動も行い、学びのサイクルをつくってほしい。

分科会⑧

お母さんのための森づくり講座
山でできることを考える！

講師：寺田菜穂子(林業女子会@岐阜)

森との関わり、森の機能について、資料をもとに学んだ後、「私たちができること」は何か話し合いました。林業に携わってきた者、そして母としての立場から見た女性でもできること、何をしたらいいか、を考える分科会は、全員が発言できる少人数ならではのアットホームな時間となりました。



森に入って直径15cmほどのヒノキを間伐体験。ノコギリでの伐採は、意外と重労働で、1本の木を伐り倒すのに何人かで交代して伐りました。最後は安全のためロープで引っ張って倒しましたが、倒れた時の振動に感嘆の声があがりました。伐ったばかりの木のみずみずしさにもびっくり。皮をめくるとツルツル！

フリートーク

- 子どもたちに林業の現場(重機が動いているところなど)を見せたいと思うが、「危ないから……」と言われる。
- ノコギリを持って山に行き、木の枝を切ってみることからやってみては？
- 自由にに使わせていただける山や森があるので、整備もしてみたいと思うけど、どんなことができるのか、どの木を伐つといいのか、どんなことに気をつけたらいいかわからない。
- だるま式ストーブで木の葉や枝を集めて燃やすなど、子どもや女性でも出来て山もきれいになる活動をしてみたらどう？ また、県に相談すると地域のボランティアさんを紹介してもらえたりする。森に目を向けるきっかけづくりとして「森の健康診断」という、素人でもできる森の測り方を教えてくれる活動もあるよ。

分科会⑨

森のようちえん 30年続けて見えてきたこと
森は発見の場、自分で考え行動する、危険や怖さを知る場！

講師：内田幸一(森のようちえん 全国ネットワーク) 運営委員長

内田さんから参加者へ「発見し、能動的に行動する子どもを育てる取組を行っている人たちには自信をもってほしい、自分たちの足元に宝物があることを忘れないでほしい」とのメッセージがありました。

- 欧州の森のようちえんは先生のキャラクターにより特色が異なるが、日本はやや硬直的な印象がある。
- 日本の森のようちえんが近年増えている理由は、子どもが現代社会から受ける影響を回避しながら、その子らしく成長する機会を与えてくれると考える人たちが増えたこと。自然志向・健康・エコロジー等の社会意識が背景となっているものと思われる。

森は発見の場
しかし子どもが何を見つけるかは問題ではなく、子ども自身が見つかる、という行為が重要。大人は森の不思議について教えずに、不思議に反応してあげればよい。

森は自分で考え行動する場
大人は時間だけを保障する。子どもがヒマになること、飽きたりすることも大事。それを子どもが何とかしようとするのも大事。秩序を学び、自然をそのまま受け入れる場である。

森は危険、怖さを知る場
チャレンジをやめたり、試みたり、自分で決めていく。心の柔軟さと適応力を得る場。

Q: どのような条件の場所が、森のようちえんのフィールドとして良い場所といえるのか？

A: 私たちは、人口密集地から30分以内、遊べる場所がある、という条件で探した。地理的な環境、来てくれる見込みを調べる必要がある。

Q: 森のようちえんを卒業した子どもたちはどのように育っていくか？

A: 幼児期だけでその後の成長が決まるわけではない。森のようちえんで親が何を学んだか、いつも子どもを認めていく・コミュニケーションをとっていくこと、迷っている子どもを支える・話を聞く・共感する姿勢が重要。大人の側の度量が問われる。子どもは育てられたとおりに(自分の子どもを)育てる。子育ては孫を育てているのと同じ。(子どもに子育ての)手本を見せているということ。

Q: 指導案等、森のようちえんの教育手法はどうしたらいいか？

A: かっちりしたものがないで大丈夫だが、森のようちえんの三要素、「環境(自然・森)(人員構成)」「プログラム(活動)」「保護者の関わり方・役割」は押さえておく必要がある。プログラムで埋め尽くす必要はない。森のようちえんは、先に経験・体験がある。例えば、素材を拾ってきて(何かを作るなど)活動に構成していく。だから活動に対して、つかみがよくなるので、やりたくないということにはなりづらい。内発的な動機で行動を起こすスイッチを入れることをしている。

分科会⑩

子どもは今を輝いてこそ生きる
～遊び場のステキな子どもたち

講師：渡部達也・美樹（NPO 法人ゆめ・まち・ねっと）

「たごっこパーク」「おもしろ荘」「子ども食堂」等の取組みをスライドショーで紹介してもらった後、子どもたちを取り巻く環境に関するデータを交え、子どもたちの居場所づくりの必要性を語っていただきました。

子どもたちを取り巻くさまざまなデータ

- 全国で校内暴力が発生した小中学校 (H25)
46,974 件 / 1,021 万人 岐阜県 ワースト 5 位
- いじめ認知件数 (H25)
173,996 件 / 1,021 万人 岐阜県 ワースト 13 位
- 中学校の不登校生徒数
95,442 人 / 353,618 人 岐阜県 ワースト 4 位
- 児童相談所相談受件数
73,802 件 岐阜県内の児童虐待 996 件



- こうしたデータから、生きづらさを抱えながら、日々を生きている子どもたちがいかに多いかが見えてくる。とくに岐阜県の指標は全国比でも悪い分野が多い。岐阜県では他県以上に森のようちえんやプレーパークを盛んにして、子どもたちの生きる力を育んでいく必要がある。
- 「遊び」によって社会性を身につける。子どもたちを仮想空間に追い込むことなく、つながりたい。
- 東日本大震災の被災地に足を運ぶ中で、子どもには何げない日常が大切であり、それを保障する遊び場が必要であることを実感した。

分科会⑪

森では子どもより大人が育つ？
～親育ちにまつわる座談会

講師：浅井智子（森のわらべ多治見園）
林育子（じゃんぐる☆ぼっけ）
小菅江美（森のようちえん てくてく）

「親育ち」とは、大人が子どもと一緒に成長すること、森はその最適な場所。森のようちえんは親自身がやりたいことができる場所であり、親がやりたいことを実現してあげる場所なんです。



座談会

- 普通の保育園に入れるのではなく森のようちえんに子どもを入れる事は勇気がいること。それができると自分で「親育ち」ができていく。
- 「森のようちえん てくてく」の保育部門を開設する際に保護者との話し合いを設けた。
 - * 保育部門開設に伴い「そこまで広げる必要があるのか」というような反対意見が多くあった。反対してくれる人は、自分のことのように考えてくれる人であるので、一番の協力者となってくれる。
 - * スタッフはフル回転で活動している。その頑張りに見合う環境を用意しなくては、続かない。

- 母親が育ってきた環境と違う環境で子どもを育てるのは難しい。自分の子どもの頃にされた事以上に子どもに接することができない母親が自分を責めてしまう。しかし、そんな母親が森のようちえんに関わることで、森の中で気持ちが緩んでいける。自分はみんなに支えられているのだと感じて、自分にOKが出せるようになることが「親育ち」でもある。
- 子どもだけでなく森のようちえんに関わっている大人たちも、育ちの力を発揮していく。年少の終わり～年中の始めにかけて、このまま森のようちえんにいてもいいのかと不安に思う時期が来る。それを乗り越えて卒園を迎えた親は、子どもの育ちの力と、仲間との子育ての面白さを実感し、森での子育てに自信を深めて巣立っていく。
 - * 森のようちえんに入っている不安。それを誰かに認めてもらえた時に安心できる。
 - * リーダーの熱い想いも大事。
 - * 森のようちえんスタッフが言いたいことを言える場に、それを受け入れる場にする。

分科会⑫

遊び場が支えた思春期の子どもたち
～何気ない日常を重ねるその先に希望がある

講師：渡部達也・美樹（NPO 法人ゆめ・まち・ねっと）

「子どもの言葉を聴き続ければ、いつもいつも（居場所に）来ることができる。聴き続ける先の希望がある」という言葉がありました。誰もができる、子どもとの関わり方ではないでしょうか。



- 「障害（しょうがい）」の「碍」は、流れをせき止める石を意味する。障害のある子どもには、目の前に生活の流れをせき止める石がある。こちら側の工夫で流れを確保してあげれば、生きづらさが軽くなる。
- 相手に安らぎを与え、受けとめる力が母性性。やってはいけません、あれをしないでというのが父性性。森のようちえんやプレーパークは、母性性に包まれた遊び場であり、居場所でありたい。素の自分でいられる、安らげる、分かちあえる、そんな空気を育みたい。
- 活動の中で、母子家庭の母親に会ったら伝えてほしい。母子家庭だから非社会的、反社会的な行動を子どもが起こすわけではない。ただ、母子家庭では往々にして、母親が父性性を強めてしまう。そうすると子どもは安らげない。「お母さんはお母さんのままで優しく、温かくね」と伝えて。
- 生きづらさを抱えた多くの子ども・若者との出会いから、非社会的、反社会的と呼ばれる行動は、生きづらさを表現しているのだとわかった。みなさんには、生きづらさを抱えた子どもを気遣える大人であってほしい。そんな大人との出会いが、子どもたちを希望へと導くから。

地域の子ども・若者とつながり続けるための「プレーパーク」の条件

- 子どもの生活圏にある
- 参加費無料
- 親の申込不要
- 年齢制限なし
- 障害（しょうがい）の有無不問
- 登校不登校不問

分科会⑬

森のようちえん認定制度を考える
～長野県の事例を参考に

講師：内田幸一（森のようちえん 全国ネットワーク）

森のようちえんや野外保育の“社会化”に向けた取り組みについて、長野県の事例をもとに紹介していただきました。



- 信州型の自然保育園は、長野県内に12～13箇所。大きいところで30人、小さいところで10人程度。
- 「こどもの森幼稚園（長野市）」は、日本で唯一の認可園の森のようちえん。
- 森のようちえんを制度化するために県に意見を上げるにしても、統一窓口が必要だった。野外保育連盟は8箇所の森のようちえんで勉強会や研究会を行うところからはじまり、連盟がスタートした。連盟設立には知事が立ち合い、知事直轄の「次世代サポート課」が担当となった。
- 信州型自然保育の委員会メンバーは無認可の団体が多かったので、認可園や大学関係者など各方面の反発が強かった（認可園でも人数が減ってきている。自分達の援助の前になぜ森のようちえんの援助が必要なのか？ しっかりした保育ができるのか？ という声）。

基本理念

- ① 生涯を見渡した保育・教育の実践
- ② 多様な保育に基づく、総合的人間力の育成
- ③ 長野の自然を子育て・保育に活用すること

県の基準

- 1日5時間以上自然に出ている⇒「特化型」
- 1日1時間以上自然にでている⇒「普及型」

研修制度

- 認定団体は研修会に参加し、報告書（年間計画、保育案、免許や資格の有無）を作成し、HPIに掲載。その活動を県が担保する。⇒最終的には補助金を充てたい。
- 信州型自然保育認定に関する説明会にも多くの市町村関係者が参加した。子育て世代の移住を進めることになる。情報の共有から“社会化”へ。
- 「野外保育“学会”」の立ち上げにより、今後、森のようちえんが学術的・科学的に研究されるようになる。

質疑応答

- Q: 認定制度のデメリットは？
- A: 時間に縛られる、有資格者の有無、場所が合うかどうか、研修制度への参加が必須であること。
- Q: 横のつながりと、行政とのつながりをどのようにつくればよいのか？
- A: 園児の数を足せば結構な数になるはず。いくつかの団体が集まれば、行政側との連携の安心材料となる。
- Q: 親の私たちが出来ることは？
- A: 母親は保育の専門家ではない。家庭の技術（料理や裁縫など）と一緒にやって教える。家庭では、生活のことを教えることが大切。